

裏磐梯の旅：五色の夢を見た

工藤君明（横浜市）

期間：2013年9月2日（月）～4日（水）（3日間）

リーダー：遠藤好美

参加者：22名

費用：22,600円 2泊4食付

宿泊先：猫魔温泉 裏磐梯猫魔ホテル

概要

猛暑が少しは和らいだかと思われた9月初めの旅行ですが、現地は雨模様、しかし、何とかもちこたえてくれました。

東京駅前に集合して、裏磐梯にあるホテルまで、お客さんをバスで送迎してくれるので、便利でだれもが安いとおっしゃる楽しい旅でした。

筆者が参加したのは、観光が主ですが、東日本大震災の復興にわずかながらでも貢献し、また幕末から明治にかけて動乱及び火山爆発によって壊滅した磐梯山地区の復興について勉強するためです。

あれが磐梯、表は菩薩、裏は夜叉

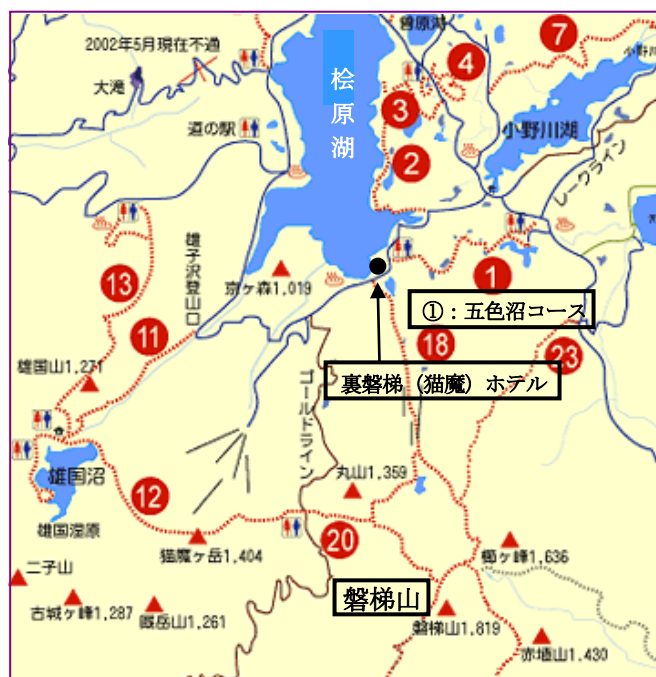
ずいぶん昔に筆者は猪苗代湖から磐梯山を眺めたことがある。なだらかな、富士山のとっぺんを切り取ったような山容であった記憶がある。それを表磐梯という。今回の旅行は磐梯山の北側に広がる裏磐梯高原である。五色沼の周りには木々が生い茂り、山の峰は雲におおわれ、余りいい眺めは見られなかった。

ところが旅行2日目の午後、にわかには晴れてきたので、桧原湖に遊覧船で乗り出した。あれが磐梯山、間近にどっかと現れた。山の一部分が吹きとばされた荒々しい姿のままである。



桧原湖からのぞむ磐梯山の雄姿

磐梯山は1888（明治21）年7月15日に噴火した。噴火といっても溶岩が流れ出したわけではない。地下に水蒸気が溜まり、圧力鍋の蓋が飛ぶように、山体が崩落したのだ。磐梯山の北側にあった溪谷などが岩な



（裏磐梯ビジターセンター資料より作成）

だれに埋め尽され、川が堰き止められてたくさんの湖や沼が作られた。湖底に沈んでしまった村もある。

その20年前の1868年、表磐梯の会津藩が明治政府に攻撃され若松城下の大半は灰燼に帰してしまった。会津は若松町となり福島県に編入され、その復興のさなかに、磐梯山が噴火した。日本では、明治になって初めての大災害であった。この前年（1887年）に日本赤十字社が設立されており、赤十字活動とはそれまで戦時救護だけであったが、世界で初めて平時の災害救護活動が行なわれたのである。

五色沼、巨岩の下に夢眠る

地図の①が五色沼自然探勝路というトレッキングコースになっている。ホテルの近くから東にのびるならかな3.6kmの道である。周りには幾つもの沼が点在している。知らない人はどれが五色沼かと疑問に思うみたいだが、大小30余りの湖沼群をまとめて五色沼という。個々には、青沼、赤沼、みどろ沼、るり沼、弁天沼、毘沙門沼などの名前がついている。

筆者は桧原湖から東に流れていく川が幾つも堰きとめられてできたと思っていたのだが、そうではなくて、水源が幾つかあるらしい。水質が酸性の沼ではプランクトンが少なく、水は透明で青く澄んだ色となる。酸性の水源でも、鉄などが含まれると、湖水の色は赤くなる。酸性度の低い湧水がある沼はプランクトンが豊富で水が濁るようになる。また桧原湖に近い沼

は水が中性となり、ふつうの湖沼と同じく不透明な薄い緑色となる。

ビジターセンターで尋ねたが、いつから「五色沼」と呼ばれるようになったのかは地元の人でも知らなかった。五色といえば、仏教を連想するが、オリンピックの基本色でもある。



五色沼トレッキング（赤沼にて）

五色沼の一角に大きな噴火岩の墓がある。荒れはてたままだった裏磐梯の緑化に初めて成功した遠藤現夢が眠っている。明治維新のころは若い会津藩士であった現無は五色沼のあたりに移り住み、1910年ごろからほぼ10年かけて赤松を中心に植林した。ところで、クーベルタンの提唱により近代オリンピックが復活したのもこのころのことである。日本が初めて参加したのは、1912年のストックホルム大会のことであり、1914年に五輪のマークが制定されている。色とりどりの美しい沼はあたり一帯が緑化されていき、日本がオリンピックに活躍して世界の仲間になっていく夢と重なり、いつしか「五色沼」と呼ばれるようになっていったのではないだろうか。

この旅行から帰ってすぐに2020年の東京オリンピック開催が決定された。遠藤現夢が裏磐梯の観光の礎を築き、それから百年して、オリンピックが東京で開催され、それとともに東日本大震災の復興が遂げられていく、五色沼はそのシンボルになればよい。

猫魔の宿に歌声ひびく

宿はかつての「裏磐梯猫魔ホテル」、この7月から星野リゾート裏磐梯ホテルとなりました。温泉、食事、娯楽そして睡眠が夜のお楽しみ。仲間とみんなでワイワイおしゃべりしながら食事するのがほかのツアー旅行とは違うWSCのいいところ、そして食事はバイキング、好きなものを、あれもこれ

も、少しずつ選んで食べる、これぞ日本の会席料理。国際標準の料理とは、1品ずつが完成された料理を出された順に食べていくもの、前菜、主菜、デザートと進んでいく。日本の料理は、1品ずつでは不完全であるが、自分の好みにより、うまく組み合わせる場所に妙味がある。これが理解できないと、ソバだけをむしゃむしゃ食べ、その後でつゆを飲み、日本のソバはまずいということになる。

10点評価で温泉5点、食事7点、娯楽7点、睡眠9点。温泉は、かけ湯がない、サウナに冷泉がない、という声があり低評価。睡眠は音も空調もベッドも蚊も何ら問題なくて安眠できた。

食後の娯楽にはこの宿の工夫が感じられた。一つは民話の語り部、もう一つは歌声喫茶。歌声喫茶といってもコーヒーが出てくるわけではない。小さな部屋に椅子がたくさん並んでいて、正面にプレーヤーがあるだけ。オーケストラを入れたいのですが、予算がないので、これでがまんしてください、と言って司会の若い男性がリクエストし、昔懐かしいあの歌この歌をみんなで楽しく歌っていくというもの。思い出をたどりつつ、みなさんが青春時代のあの頃に戻っておいりました。民話の語りは、猫魔ヶ岳に古くから言い伝えられている化け猫の話「猫魔伝説」を東北訛りの口調で語るというもの。猫は年老いると尾が二又に分かれ、山に棲み、人に悪さをすると古くは信じられており、猫又と恐れられていた。近くの猫魔ヶ岳にまつわる伝説が演じられるのだが、善悪はかならず報いを受けるという報恩説話、おまけに説教がついて、フィニッシュが「四季の歌」の合唱、ちょっと腰が引けてしまった。とはいえ、お客さんに何とか楽しんでいただこうという熱意は感じられました。

楽しいワクワクする旅をこれからも企画して下さることを期待しています。



夕食のあとの懇親会（磐梯山ホテル）